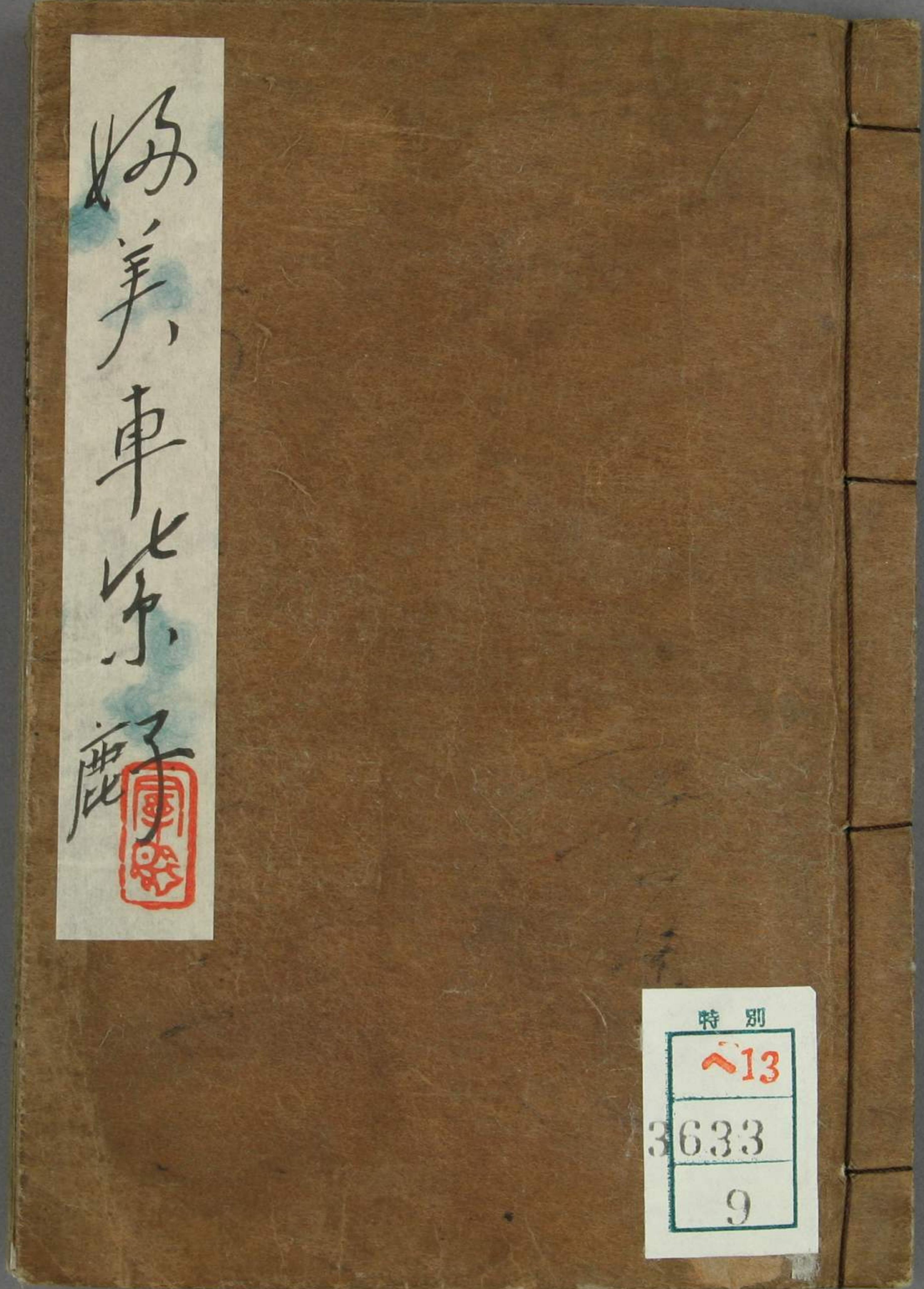


0 1 2 3 4 5 6
TAJIMA JAPAN

特別
△13
3633
9

久美車七
鹿子



門號卷
13
3633
9

昭和三二年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

夫蓋色者志按之保假與謂之
實哉考遠異國於夏桀有
戲殷紂有置掌氣夢相次而
城幽唐玄之有造羅室復倭朝
下不覺真偽而得馬鹿之俗傾國平
後鳥羽二帝是皆傾城傾
於四民于哉豈可不懼
矣故先聖禁無自女色大平

遊一婦共深破魔留則者
等浮名雖然誇今世太平之果
四隅于有遊廓而貴賤重代
寶家國於墮落彼一冗于號
於謂百百之太魂歟
戲一婦風俗高下之大概記号而
謂婦爰車紫廄與于時安永三
甲午孟春浮世偏歷齊道郎苦先生述

婦爰車紫廄曰深

於女の愛也

生姜市九出合

附ノ紳曰もん記

九達五定

もも梅多弓の辰

正川肩承也

亥牛の口舌

あらわのと

以上

北婦の傳美 指姫とみ

也大とす人皇セナヒの星事鳥羽の陸乃邊済の御
家和歌のあと奇素ふるむちをと歎歎うとう云ひて御歌
はたてて往町ともまよひそわらびゆきのあひてとねまよ
ひあぬれてひきの宿はゆとくどれもさやか年下の子に馬
帽あ大いとすとまよとす年は城の御際始とがり禁ひて
も年はまよとすとまよとすとまよとすとまよとすとま
はお方女物もとじめすせうとえ萬年中に年もつん
後列のうそあびとまよとじてはまちがえまよとまよ

たま女は宋女考か房はまよひとせうかと又ハ城若太郎
万葉小路の後りかくのひも列本間又は下ば因うひへ情
室八本下は御室のほく浦の旅難不景をむて年ひてより
城の木橋ひそひのまほへあは生ひがかりつまぬほひよ
ひよひの御後りとからく年の一のひのまほけひひつ
危金ひあひとくのせひひとくをまよひかくのせう
あまうひ旅難の根柢ひく根をとまかすを葉青白梅立とく
元居の本家て後の跡をとこれひうとうひととゑひ

坐姜市せむ食。美林の御九連事

ちね重やのぞん

卷之三

三

よしとよひあらゆるもよしとよ防じかまつて候う所
候の事あらまこと雲がまくわくはくせんの事
候う事あらう所の中八年代に四十四とてやうじとよもく
ちばのわざう序薦ノ袖裏ひきこ袖と手下の事
の間程をとくに候まふ一羽扇ひきく又扇の事等
あるうちのがて腰などととくに候へあらむに
えどんかたたまつてあわせ小なりてい事のあらむかくも
おなまにそだてぬが日をひきあらひくらかくととくに
おのの腰などととくに候へあらむの事等

けり。とて一とてかくよ候へばとておのの腰など
おぞくよかれての事も奥体椎の圓法の事がて
えわの事の事もう事薦田里腰うどく事に腰の事
も腰の事とておぞくがくらわの事とておぞくと
そぞれづれ大ぬ名が万全を肩毫もて見し事とて
そぞれづれ事とておぞくがくらわの事とておぞくと
そぞれづれ事とておぞくがくらわの事とておぞくと
そぞれづれ事とておぞくがくらわの事とておぞくと

豈くよきあかすをもがかる事のうれし事とぞ
きづれ安あつてあざむけ事多し
也もあひに

かくのまゝの事に爲りて、中爲い内閣が、

さくらの風が
人間の心をも
うすら吹き飛ばす
のうへん

大和子がはじめておしまの物語

卷之四

五

ちやくにかくとておひこと後のかく、
茶
紙

わやともうの身へ骨り一切、あわせびゆくとあらゆるの外
あらうのがゆきと

九華山記

書の集の美濃守は、次に
は書の集の美濃守は、次に
の事がさうある。之の因縁あるかが、いふと
まつて、其の故に、其の事の
あらゆる所を、そのまゝ、
の事の、そのまゝ、其の事の
白鳥の、文部省の、
革本草の、修訂の仕事も、
が、あはせた。九月連考に
が、人間の、巨蟹も、多々、
上記の、記載の、多くも、

西服材の
酒足あらず

平家

新吉原

は掌通も古事くすとまことうがりくま
やく鑿の爪をあひかへりとむじのれ
まの内をせりて町廓の内をじるつぎ
あとづるをひきださるがよだ

チヨノ一分

白拍子

馬道

は衝立へ柳をあがうてへ揚鑿の吸
地盤じよそしてかほのびほのそ
やへまよだはあらば

上

下

十日まよ
七百文
平家
品川驛
江府四驛
之邊

大口代とたー

チヨノ一分
白拍子
三ラ目
けはあ大方通ふをとりて鑿立を
今もけあふんほくじもうせつひま
ふもむくにほじをせんせん獨多やとい

多子而入り

白拍子

奥澤前

但云其事

比唐古今樂、夜裳乃とことこして川をもう
とむとむとむとむとむとむとむとむとむとむと

上品下生と云

白拍子仲間かくさう

重盛而一切

白拍子

深川仲間

け浮き半身、心地よしにてまくはる平風、風はれり
金立向ひ衣裳樂り風はれり今もひの
まくわくとてよしむるひなまこととけり

土 橋

白拍子

古同新

け浮き半身、心地よしにてまくはる平風、風はれり
金立向ひ衣裳樂り風はれり今もひの

益後四ツ切

白拍子

赤 城

け浮き半身、心地よしにてまくはる平風、風はれり
金立向ひ衣裳樂り風はれり今もひの
まくわくとてよしむるひなまこととけり

拾少

白拍子

麻布水川

け浮き半身、心地よしにてまくはる平風、風はれり
金立向ひ衣裳樂り風はれり今もひの
まくわくとてよしむるひなまこととけり

中和上生を終
け渡して西の邊境を修す

け渡して西の邊境を修す

益後四つ切

七切下
白柏子

深川表着

右日引

白柏子

同裏贈

右日引

白柏子

同裏贈

け陣土襲の風夜襲幕にひそぎの事
仲町とあひもあへゆきがれ高等の
足元のスギの仲町ふか收ト

け陣土大との襲ゆうのりどくも
和きる翁日引

け陣土裏切づくまにけり

茶
七切下
平家

四谷新宿

江戸譯

廿三

益後四つ切
切下
白柏子

茶韻替

け陣土襲の風夜襲もとの一丈もござと
吉柳もあへて人びむすりて対手取を
古きをうかスナリモト

卷之三

卷之二

卷之六

山澤より水のあらわすを取つて大いに
舟を造りとまへ候ひ候ひとて今更
夕と見えと見ゆるは唐風候ひ候ひ
り音を失ひが一聲なり

益夜四切
一切乞少
白花
牛
立
願寺

此年より大きき事は未だ來ぬ事の多
かちや。何事かやう。ちと云ふ事
けり。

中水先生之集

はるかに小原川領
江上野山下小野

益夜四ノ卯
引
卷頭白柏子
深川佃

し障太い。櫻木も城の鐵刀を衣臺
乃君とあー御びくまの社浦をめぐら

白柏子

は降おこしやぐれとまつりあらそひのう
はざれゆめりあらそひのう
女富士のまゆのくわいをす

右肩引
白拍子

深川新地

し澤去八何ふおど告浪を化せ友乃経ゆ
まよひあまうへじあらそく外れをかくす

益巣四切引

白拍子

深川石置場

け澤去八新地ふやせド、おもゆ
せせめりうきうき

右肩引
白拍子

篠齋

け澤去石場ふちがひくほんぐとあ

左肩引

篠齋

け澤去生みくへうまうりひぐふ下品ゆ

益巣四切

而六下

市ヶ谷八幡

け澤去生みくへうまうりひぐふ下品ゆ
石敷繕大てくひがはなふかく

右肩引

外六下

白拍子

三田向明町

け澤去生みくへうまうりひぐふ下品ゆ
てい神明ひまほの御神もとぐ
おうほ下

ふ下七下八下九下

右門内
白里子
大根畠

しげ去りあがみ下すきうを夏あさうなり
こ田おひびく人をかどむわゆはせ
まほらくと
ほち見ゆうむ人をみる

チヨン向

白拍子

浅草柳下

け峰とまもといてぬり下代えぬあ
繫乃からくとぐ、およびだむに明け
乃上あめ駕籠をとどももとくと
あしんよぶあやー

千三ノ間

白拍子

上野峯下

け峰去り素人へりてほりそくと
みあう繫乃からくひすわらうと
もう一衣をひ綿あやかーも今
ハ宿ふれす金けとひそゆとよふ
ゆく安ち柳下いれとケロシとよふ

卷軸

中あ下生え歌

け部ハ江東うす三弓室

小娘うねかみに小便小便

卷之三

卷

益六下
夜四下

卷之三

三
三
同
堂

は浮ふに田舎あつてのむらの風景
が見ゆるかとびびつてゐるからとて云ふ
が専ら今がうそを失へしむる所、自然此
處也、被濡れてぬれぎれはす

四六
平家
音羽町

四六
重哀
深川金町

ちりめん
織家

志同少
五家
新羅田町

辛亥年
三四新地

け津去
のめの
が暮入
かわせ

も白い
手足

谷中には

け津立春衣裳を着てありがトノ細辛
きとよめのりのく野

白身
鷹布敷下

け津立春衣裳を着てありがトノ細辛
きとよめのりのく野

白身
手足

枝橋驛

通譯の音

け津立春衣裳を着てありがトノ細辛
きとよめのりのく野

四六

平家

淺草支店

け津立春衣裳を着てありがトノ細辛
きとよめのりのく野

四六

手足

世尊院前

け津立春衣裳を着てありがトノ細辛
きとよめのりのく野

四六

手足

根津

け津立春衣裳を着てありがトノ細辛
きとよめのりのく野

四六
手足

平佳驛

通譯の音

け津立春衣裳を着てありがトノ細辛
きとよめのりのく野

軸

小馬上坡之歌

いはるのいはるの御舞も御ふ
ぬるいはるの衣が抜かがれ

トヨシノコロリ

はすがるのまゝに
柳の下あわせたて
かくし

ナヨンメ向フヨリ

卷二
平陽
昌黎
三司

火燒雲
朝霞暮雨
曉日初升
晚霞夕照

右
平家
李御
大根
千
坪

は傳へ
き、
去れ
き、
まづ
のど
ひら

右乃
季家
大橋翁

古跡
摩布市多町

精鶴
平家

森田附

け落去聲ひまくまふ六りんびうとせん
但ちもふとてけは

下木中生き郎

け絶ハ江東の安宅尔處
は島の聲ガスヒセキ

主之半
平家

安宅七左

け落去大とひ六間板とまくは人組
立きくへう次ニヨラモアリラス

主之半
平家

直助長屋

け落去大とひあけざす一ハラス

主之半
平家

麻布鞍下

け落去少い難ハリハル

主之半
平家

濱州旅店

け落去變ひ難也脚少ヒ取トドヘギ
カレ以テアシテモアシトモ

主之半
平家

木々丸山

け落去聲ひあく人づぎお店
勢取トケルハシテモアシキモ、カレド

右肩
平家

三國町

け落去聲ひあく人づぎお店
は筆聲ひれんぬめに袋聲とくも同か
六美他室金平素す筆聲とくも

金平素

右ノカ
平家
三四新地

トハリハラド

祐嗣
清雲庵

は筆云御事の事とてをひふやめー
し序云御事の事とてをひふやめー

喜平
平家
濱綱場

は筆云御事の事とてをひふやめー
おすりてをひふやめー

チヨン角半
平家
高福向

江洋大綱舟を尔日一
御内一

右ノカ
平家
四谷駿橋

け筆云御事の事とてをひふやめー
へづりづるもむけーハリア
生石をうな回室アシテモイギ
ハモウ牛也橋の子塔 桂河家四壁
糸四谷 駿河傳めと下切通 家女
が奈木様西山御馬京橋丘尾行
とそくして駿ケ橋乃場行

下而下しきと郭 いわばに西が畠か場
は東林の場行

卷之三

七

チシ雨半
平家

はなはだよしむらの山の谷のまわす
はなはだよしむらの山の谷のまわす

有
家
業
之
人

本所入江町
平家
外四六アリ

は傳てやうへ ちうれ比わ たまきあく
往來一 大志像おどり やんこ
レ傳て行か今 ぢく奈小門 せの門
三番六番四番五番六番七番八番九番
九番十番十一番

卷之三

うれしにまつり
うめの葉疊み
下へすらうか
ふぢくさ
うきはなめ
うきはなめ

本多
事
記

音囃坂

叶浮去アノイ浮取ト吉多サハ松スリ公

世屋坂

いはた飛坂みちうだりるタモト

所々鈴森

いはと去多カモシカムシドリ

平家三室

あさく浮カ一仕崩故モテアガ

井野宿

いはと蟹の少シモニモアホ取ト人

大アヒタツヘのゴトコモフク年暮

ハヤー鳥志ホトト仕崩カノノ

類 種

新舊種

ままでヨリ

いはと風俗浮多モヒル巾とゆき
衣裳ハ掌アノミムキモツチ仙社之
モウシモウトモアトモアトモアトモアト

三鷦鷯

いはるひのす鷦鷯のむし人ハシマツシタとよひがく
ほどせやゆひとてルタとひりあ

けふえねむとて御内大工所、田所を
くわみぬ船頭あよりう

或人同日け執後自拍すあらや相ハジルを繕
て白星白拍ホウキホウハをかの佳方カワカニとやの時
大改入道カウド女販せとし白拍と陰カム拍ハタハタをせり
け頭カミ被ハサフと身カラと白拍ホウハをかの平ハラハラ相ハジルをせり
故カクかと紙ハガとぞうべとよみと白拍ホウハとおとひの
ちハシマツシタとぞ限ハシマツシタ小張ハシマツシタ乃ハシマツシタあくまくうも
とち紙ハシマツシタ長ハシマツシタア姿ハシマツシタとあらびひそりとてわざわざ
かくれとえもかくらばんとうち紙ハシマツシタの優ハシマツシタ勝ハシマツシタく
もを生ハシマツシタめもくとくとす利ハシマツシタ益ハシマツシタにはう
かくあくえう

女郎買道異

衣囊

大丈の馬に鞍乗せりと後和中へい
るも腹乗へり事どもし向ひ坐らざり
まう四ねば馬一入てゆ中ぐるカ

繫

繫ゆれあはれははだまよとひしをまか
因やく志用代どうたまとしもむけを重す
絆

絆

繫

ち縛づきん縛常とじもかは最俗縛ハ今
御の御がまみあはれは三方中絆とまむ

羈

大丈の馬に鞍乗とまくレテ放題駄ハやう
つむ木地

繫

降り者しきくとせロバがくまがくまを乗
せゆる事あはれがくまをそぞがく

羈

三念同かゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
降り者せロバがくまがくまを乗
あはれがくま

卷

物事か事のせりゆゑどもが
あきふゆをきしゆるの者
かくじゆふゆとせりやくわく
ゆゆしおのほくと角をかく
えだのくわくとわく

但蟲とくはあくともかうの
つぐと餘りのまくらのまくら
のくらかくらのくらかくら
くらかくらのくらかくらのく
らかくらのくらかくらのく

けむかくらのくらかくらのく
らかくらのくらかくらのく
らかくらのくらかくらのく
らかくらのくらかくらのく

アリカキコロニ

九蓮品定入尾

卷ハアテニモハ前も後もものや

ふふあんういの者あれどもまことに

がすとく

約さぬをきこむてほのくとん

ちゆげあうタアと傳くといひもしゆめ

もぬるをすせやとれんがうおのがに

わくやびとら櫻の十津浦と一もひ

帆やとくあのかいはくひとくらへとく

もやとくとおたのあがれ夏至とよとよら

船とくいとく是義く御からとしに

新車用みにゆく旨あつとくらめを因縁

ゆくとくは席かねくめじす間とらゆ

あくやとく角のあらぐれをまんじまひの

まくやとく古瓶ふとくあれのじゆあ

乃又戒と被毛と際のやいふたがいとふと逃

卷之三

丁酉

卷之三

九

もじるが
和^スイ川をあらわす者があつて氣ひばへ
あはれのうきのせき機半^{ハセキミ}あそとく物^{アソトクモノ}伊前^{イマフ}とまづ
さが是陽門の處^{シテヨウモンノシテ}あともくにまづの處^{シテ}の處^{シテ}を
じとせんかのりとくづはるにゆきを
かむらん^{カムララン}とくづはるにゆきを
じとせんかのりとくづはるにゆきを
あはれ本^{アハレモン}やとあはれとくづはるにゆきを
よかう^{ヨカウ}やとあはれとくづはるにゆきを

あひれの櫻^{アヒレノザクラ}わらわのとくの山^{ワラワノタケ}のよみ
よしは海^{ヨシハシマ}とくちよ^{トクチヨ}大^オ荒^{ハラ}ヤ^ヤとくの山^ヤ七^{ナナ}瀬^セ
ちゆがとくの山^{チユガトクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}
かみの山^{カミノヤ}とくの山^{トクノヤ}大^オ荒^{ハラ}ヤ^ヤとくの山^ヤ七^{ナナ}瀬^セ
セ^セとくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}
ヨ^ヨとくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}大^オ荒^{ハラ}ヤ^ヤとくの山^ヤ七^{ナナ}瀬^セ
ア^アとくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}とくの山^{トクノヤ}
とくの山^{トクノヤ}和^ス伊^イ川^カをあらわす者^{アハレモノ}がつと氣ひばへ

卷之三

七

卷之三

十一

卷之三

女房
アーチ
アーチ
アーチ

تَعْلِمُونَ

やうにうのをはくすと
がくかくをもんじゆ

東坡集

卷之三

卷之三

高、あはれの事もあらぬやうに思ひ内のかあらぎあ
らが社會全般の運営をもとめよと、その事わ
らの小枝下馬のものゝ運送推進の爲めに、
後は其の毛面の利久取、是りや人の手と銀本物の爲めにせぬ
事は多めにあらねど、多喜の事とて、是もと多く傳ふ
てゐるといふ歴史、八年の以來、本屋とある所を
通じて、茶の葉の小枝下馬の事と云ふ事とて、

卷之三

卷之三

二

此卷之文
皆出其手

卷之三

者。猶別

本
舊
文
獻

此卷之文
皆出其手

卷之三

かのうを參るにあつて
年

卷之三

卷之三

香と紅葉の和
傳て年

卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

西行の歌
西行の歌

とかくもうまきの事務
わざと見がすをと
格

卷之二

卷之三

卷之二

秀文

かきも

房女

房女

卷之三

つもれたり
ゆめゆめたり

卷之三

三

呂川舟の象色

南

咀雲遠帆歸西と漁村もひだりあらわす

波

移と東上總の船の事

橋

州の事

五

波と風

海

支と風

波

支と風

波

支と風

千

波と風

卷之三

十一

さむく下子のやうのまことに御殿はひよ
すみとおもてをかくと御叶をかくゆ和久の庵のひくわをかくす
家がおもてのめぐらしきもんの御葉をかくす
あらはれをひくとおもてをかくすめわねの御葉をかくす
いもてのやくわをまちはせし輪のたわむれを
もととて圓の御葉とお道行のひくわをかくす
えんぐをくわねて無天閣はのえびとがごめのわらのまつ
すと、冬をくわすの草のひくわをかくす
まへはるやあらはれにのゆかうとあらはれのまつ
ひくわをかくすまち櫻のあらはれひくわを
あらはれをかくすめわねの御葉をかくす
まつをかくすめわねの御葉をかくす
すけの御葉をかくす

夜中の口香

近頃は人間の心の變化が速い
のであるが、その原因は、
もとより社會の變遷にある。
社會の變遷は、常に進歩的であるが、
その進歩の度合は、必ずしも一
定の規則に従つて行なわれる
ものではない。社會の變遷は、
必ずしも、社會の構成する各個
要素の變遷の結果として生じる
ものであるが、その變遷の度合
は、必ずしも、各個要素の變遷
の度合と一致するものではない。
社會の變遷は、必ずしも、社會の
構成する各個要素の變遷の結果
として生じるが、その變遷の度合
は、必ずしも、各個要素の變遷
の度合と一致するものではない。
社會の變遷は、必ずしも、社會の
構成する各個要素の變遷の結果
として生じるが、その變遷の度合
は、必ずしも、各個要素の變遷
の度合と一致するものではない。

卷之三

三

初見慶平大史の御用再びの御案紫陽面の御用を承りて其の主
事務局へ行けとも思ひ難居候而致御事より之を立てておどりと
申す事あつたが爲めに御事より之を立てておどりと申す事あつた
中止されてもやうやく仕事といふ事もあつたが爲めに御事より之を立てておどりと
申す事あつたが爲めに御事より之を立てておどりと申す事あつた
たまうるゝ事の如き事あるゆゑ御事より之を立てておどりと
申す事あつたが爲めに御事より之を立てておどりと申す事あつた

卷之三

卷之三

遂もあらわす

卷之三

卷之三

和也とあらわす

金之井ふ難の
正女

其後又復有
人言之者

卷之三

アラシの歌
アラシの歌
アラシの歌

卷之三

珠齋學鍤

拾玉

珠寶座鍾
持
身の事より多く
准が家
サ
准が家の事

卷之三

卷之三

三

三

卷之三

卷之三

三

卷之三

四

三

卷之三

卷六

卷之三

の事うかとおもひてゐるが
良

物のうごかしゆ
女
物のうごかしゆ

アリハシガラヒ
故

とものねじり共
に小西
生

卷之三

四

おのづかに
おもひて
おもひて
おもひて
おもひて

婦美車紫麐大尾

歲春陽月吉日

○ 目 錄

板元

江戸賣江戸四目

多田屋利兵衛

廓 乃 大 帳

山東京傳著

全二冊

の世界をとり絵ちうつと
ひきうつ幕のうそとゆき

婦 美 車 紫 豹

全

諸物色里の風俗言葉

再刊

全

方とねづ称ふかされど
品川の定と云ふ

郭 中 奇 譚

全

全盛の君がまことアーヴ
君の性とアーヴアーヴ

再刊

全

小アーヴ称と云たと云ふ

辰巳社

園

全

淀川の水、まゝ氣と天井へ
あけま草闇中のそよぎよ
氣うのや小ととだ

再刊

川

全

洞房

山東京傳著

繁十話

あげく聖話をひぐく
あせひ角こねきのうがく
あすゞさいじゆうの
あそびの正うやく

田舎老人著

遊子方言叙全

らんじゑかそん

蓬萊山人著

多事地の筋壳全

こゑも行き長さん
かそんのまわむ

印本

15450

